

やすらぎ通信

第 29 号 (平成 25 年 4 月 1 日) 発行：大阪府立急性期・総合医療センター

卯月 (麦秋)

めだかの学校

茶木滋 (ちゃきしげる) 作詞 中田喜直 作曲

めだかの学校は 川のなか
そっとのぞいて みてごらん
そっとのぞいて みてごらん
みんなで おゆうぎ しているよ

めだかの学校の めだかたち
だれが生徒か 先生か
だれが生徒か 先生か
みんなで げんきに あそんでる

めだかの学校は うれしそう
水にながれて つーいつい
水にながれて つーいつい
みんなが そろって つーいつい

あの震災から三度目の4月を迎えました。神戸の震災からは19度目の4月となります。私たち京阪神に住む人間に取りまして、あの神戸・淡路の地震は自ら体験した震災だったことから、火災やビル、家屋、高速道路などの倒壊などで多くの身近な人々が犠牲になった苦しい思い出はまだ脳裏に焼き付いています。しかし、その苦しい思い出も随分と遠い過去のように感じた感じがします。それは、一昨年に関東の地震が、私たちの苦しい思い出を遠い過去に追いやるくらいに大きな衝撃を私たちにもたらし、今もなお与え続けているからです。

大津波と言う人間の力では克服しようもない大きな自然の力を前にして、また、安全だと繰り返言われ続けていた原子力発電所での炉心溶融という絶対起こしてはならない深刻な事態の発生を前にして、改めて自然とのつきあい方の原点を私たちに思い起こさせました。

この東北の震災以降、毎日目の前に広がる自然も、これまでと違った姿に見え、また、自然のわずかな変化をも見逃さず、私たちの日々の行いを検証する鏡にすべしと痛感するようになりました。

久々に今年の冬はことのほか寒い冬でした。最近の暖冬に馴れきった体には、少なくともそのように感じました。しかし、この寒いと思った今年の冬でも、大阪より2～3度は低いと言われている内陸の盆地にあるわが家の戸外にある水道も凍てついて、朝に湯をかけないと水が出ないということは一度もなく、また、庭の水槽に厚い氷を張った日もほとんどありませんでした。

温室効果ガスの排出は、こうしている間にも地球の許容量を超えて排出され、気象のわずかな変化の影響を最も受けやすい自然界の生物たちも、レッドデータブックに掲載される種を増やしています。

こうした、問題に直接原因があるのかないのか分かりませんが、万代池に渡ってくる鳥の中で、今年はサギの仲間(アオサギ、オオサギ)の数がぐっと少なくなったように感じました。

朝夕の通勤で万代池の自然を毎日目にしてきた私にとって、この池の渡り鳥たちは私の心のオアシスであり、また彩りでもありました。特に、アオサギやオオサギの優美な気品のあふ立ち姿は、色の少ない真冬の万代池の光景に日本画のような趣を与えてくれます。

自然の変化、異常をいち早く感じ取って危険回避行動をとれるのは私たち人間ではなく、自然界に身を置く動物や鳥類、爬虫類、昆虫たち野生生物です。渡ってくる鳥の数が減るといふ現象も、自然界には「たまたま」ということはなく、それなりの必然性があるものと考えた方がよいと思っています。

さて、平成4年(1992年)2月、環境庁は「日本の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト(=レッドリスト)」のうち、汽水・淡水魚類についての見直し結果を発表しました。その76種のなかにメダカが含まれました。あれから20年を経過しますが、メダカは今確実に絶滅に向かって歩んでいるといっても過言ではない状況が続いています。

今月は、この絶滅の危機に瀕しているメダカを取り上げ、自然の変化と密接に関係しているメダカの減少について、ともに考えてみたいと思います。

日本のこどもたちの遊びから「メダカ獲り」が姿を消してどのくらい経つでしょうか。私の記憶ではまだ、日本が「60 年安保闘争で」騒然としていた頃、すなわち子どもの遊びでは「赤胴鈴之助ごっこ」「月光仮面ごっこ」が盛んであった頃までは、まだ小川は小川のまま流れ、4 月に川面が緩む頃になるとメダカの群れが川面に漂って子どもたちの遊び相手になっていた記憶があります。

私も、母に買ってもらった子ども用のタモ網を手に、近所の遊び友達と村の中を流れる小川で一緒にメダカ獲りをよくしました。当時の小川は水もゆったりと流れ、土手も川底も土のまままで浅く、今のようなコンクリートで深く掘りかためられたものではなく、川遊びそのものが危なくなかった時代です。また、土手にはレンゲやタンポポ、スマレなどの美しい野草が咲き乱れ、メダカ獲りに飽きると、友達とゴロンとレンゲの群生をマットレス代わりに寝そべり、流れゆく雲や飛んでいるヒバリたちを見ながら、楽しく語り合った記憶が残っています。

こうした、「メダカ獲り」の遊びも、幼稚園から小学校低学年までで、高学年になって来ると、川面をゆったりとしか泳げないために簡単にすくえるメダカは「どんくさく」遊びの対象からは外れ、動きの素早いモロコ（“スジ”とも言った）やコブナ獲りに夢中になるように変わっていききました。

農村の子どもの水遊びが一番賑やかになるのは、5 月から6月にかけての田植えのシーズンです。5 月の中下旬に小川やそこから枝分かれしている水路から田んぼに水が入り始めると、いろんな水生生物が小川から田んぼに入り込みます。カエル、アメンボウ、ゲンゴロウ、トンボのヤゴなどもメダカや、モロコ、コブナなどと共に田んぼに入り込み、カエルやメダカなどは田んぼで産卵し、卵からかえったオタマジャクシやメダカの稚魚たちは田んぼを動き回り、また水路を通って小川に帰って行きます。カエルの卵を家に持って帰り、水槽で飼って小さな小さなおたまじゃくしの誕生を観察することも、多くの子どもたちの楽しみでした。

もちろん、田んぼは原始的な自然ではありません。人間の手の加わった自然であり、二次的自然と呼べるものです。人間が自らの生存や経済活動のために自然を利用することは不可避ですが、当時の日本の農村では、自然に手を加えても、自然の生態系を根本的に破壊するような改変は行われませんでした。なぜなら、毎年の米や麦や野菜の作付を維持していくには、そうした基盤である自然の維持が不可欠であったからです。自然への負荷をできるだけ小さくし、自然と共生した農業生産が行われていました。

しかし、この状況は安保騒動が収まり、池田内閣の高度経済成長政策の導入によって急激に変わっていきます。1960 年代の高度経済成長により、農村の姿は大きく変容し、1970 年代の田中内閣の日本列島改造論あたりから決定的な農村環境の転換がもたらされます。

メダカが、こどもたちの前から姿を消しだしたのもちょうどこの頃です。

経済発展の原動力になったのが、全国の津々浦々にいたる公共投資と言われる土木建設投資で、それが、農村環境を大きく変えてしまいました。

私の故郷でも、この頃からみると風景が急激に変わっていきました。私の家は「下ツ道」という藤原京時代からの街道に面してあります。紀元 7 世紀頃日本の首都であった大和の地は、東側から西側に「上ツ道」「中ツ道」「下ツ道」と南北の 3 本の幹線道路が通り、藤原

京から平城京へ、さらに首都が京都に移ってからは平安京へと向かう大動脈になっていたのです。しかも、昔の人たちは今のように何の科学的なデータもないのに、昔は湖であった最も低い盆地中央部を通らずに、比較的土の高地の高い場所に3本の幹線道路を作り、水害で道路が使えなくなることを回避すること術を知っていたのです。

この下ツ道は、私が小学生の頃までは舗装されていない地道で、自動車はたまにしか通らず、また、時々何かの行事に参加する馬や農耕馬が通ることもあり、本当に空気と時間はゆったりと流れていました。まさしく日本の農村風景を代表するような村でした。ただ、唯一他の農村と異なるのは、昔は大阪電気軌道といい、当時は既に近畿日本鉄道に変わっていましたが、単線の線路が敷かれ、京都・大阪に向かう私鉄の駅が村の入り口付近に設けられていたことです。ちょうど二駅向こうの終点駅の先には全国的な宗教教団の本部があり、多くの参拝客が鉄道を利用して訪れるため鉄道の線路が敷かれたのでしょう。しかし、この鉄道の駅があったおかげで、村人たちにとっては、鉄道により都会の賑やかさとつながっているという満足感を得ることができました。

こうした、片田舎が徐々に変わり出したのは、やはり東京オリンピックが開催されることが決まり、日本経済も高度成長の波に乗り始めた頃で、特に象徴的だったのは、前の下ツ道が舗装され、地道からアスファルトの道路に変わったことです。また、高速道路も整備され、西名阪自動車道と、国道25号線の名阪国道化の工事も開始されました。今まで夜になると真っ暗だった東の山も、高速道路のオレンジ色のライトで山に曲線的なラインの模様が入り、受験勉強をしながら時々窓を開け、そのライトを見ながら勉強の疲れを休めたりしました。この時に流れていた曲は石田あゆみのブルーライト横浜でした。ブルーライト横浜の曲を聴きながら眺める名阪国道のオレンジライトに何か自分の未来が開けていくような明るさをその時は感じたものでした。

この頃から農業にも機械化の波が始まり、従来の牛を使って耕していた田んぼに耕運機が使われ出しました。牛を使っていた時代は各農家には「牛小屋」が必ずあり、裕福な農家は自前の牛を飼い、そうでない農家は農繁期の時期に牛を持っている農家にお金を払いその時期だけ牛を借りてくるのです。それが耕運機と言う「素晴らしい」機械が導入され、コメ作りに革命的な変化をもたらされました。しかし、この耕運機も当初は非常に高く、1軒の農家では買えないことが多く、最初の頃は4～5軒の農家で共同購入するケースが多く見られました。

そして、農薬も多く使われ出したのもこの頃です。特に今でも覚えています、水田の稲が育ってくる夏に農薬の空中散布が行われ出しました。ウンカなどの害虫を殺す薬を一斉に軽飛行機を使い散布していました。害虫駆除の効果の向上と効率化を図るため農家組合などの共同組織が飛行機を共同チャーターして害虫を面的に殺していました。空中散布の日時は、予め対象地域には農家組合や自治組織などを通じて知らされるのですが、そのようなことにあまり頓着しない小学生や中学生の頃の私は、何度か外で遊んでいるときに空中散布に出くわしたことがあります。低空で飛ぶ飛行機から白い農薬の粉が帯のように排出され、あたり一面が真っ白なスモッグのように覆われるのです。この白い粉を被った私は、大急ぎで家に帰り顔や手を洗ったものでした。この空中散布は、田んぼの害虫の駆除には効果があったと思いますが、薬を撒く必要のないところにも薬が落ちることになり、時には空中散布

のあと川に多くの魚が白い腹を上を浮かんでいる時がありました。この時のことが空中散布に原因があったのかどうか、子どもの私には分かりませんでした。小川に生息していた生物には決していいものではなかったことは子どもの私にも推測がつかしました。

しかし、こんなことが生じて、小川で泳いでいたフナやモロコなどの生物には経済的価値がなかったため、誰もが咎める人はいませんでした。この空中散布は4～5年継続されましたが、なぜかある時からぴたりと行われなくなりました。

農村の変貌は、田中内閣の日本列島改造論が出た頃からさらに著しくなりました。あらゆるものが、コンクリートに変わっていったのです。その象徴が、童謡や唱歌で歌われてきた小川が、「三面張り」と称せられるコンクリートの水路へ急激に変わっていったことです。

農村部で、小川がもっていた主要な機能の一つは田んぼへの農業用水の供給です。私の住んでいた地域はもともと大きな河川がなく、江戸から明治にかけてもたびたび水飢饉に苦しめられたことから、多くのため池が作られ、一つの村には一つの溜め池がありました。そして、田植えの時期や、夏の水抜きが終わって十分に稲が根を張った頃を見計らって行う田んぼへの通水は、池からまず小川へ、そして小川から最も地形的に一番高い土地の田んぼに通水し、あとは順に高い田んぼから低い田んぼへ順に通水していき、最終的に村はずれの最も低い田んぼから小川に水を戻すという「掬」で昔から通水が行われてきました。

このために、田植え前の時期になると村人(農家)総出で、「川掘り」という共同作業で、小川に堆積した泥、土や雑草を除去したり、川幅を元に戻すことを行って、田植えのための通水の準備をしました。

水路を三面張りにすることの直接的な理由はこの重労働を村人から解放するという名目で行われました。しかし、この頃になると、上は国が発注する巨大なダムや高速道路、港湾、空港から下はこのような地域単位の事業まで公共事業が経済発展の牽引車のように位置づけられ、地方自治体は先を争って公共事業の予算獲得に血眼になり、その公共事業に上は大手ゼネコンから下は小さな土木会社まで多くの建設会社が群がるという構図が出来上がっていました。従って、本当に純粋に村人のことを思って小川の三面張り化が全国の農村部で進められたのか疑問が残ります。

また、こうした農村における小川の三面張り化とともに進められたのは、広域的な農業利水事業です。最も雨が降る紀伊山地の中に、巨大な農業用水の利水ダムを建設し、長距離の導入管を受水地まで敷設し、そこから受水地の水路に流し込み各田んぼに配水することにより、農村部の農業に必要な水を安定的に供給しようというわけです。このために、この事業のために毎年多額の国の財政支出が行われました。また、県も市町村も農業団体もこうした事業を積極的に推進しました。

こうした広域的な利水事業と農村部の小川の三面張り化はセットで行われたのです。広域利水の水を受水地で効率よく配水するためにも水の通りがよくなる三面張りが必要だったのです。

しかし、結果的にはこの三面張り化は農村に惨憺たる結果をもたらしました。日本のほとんどの農村部から「春の小川」で歌われたような美しい小川の風景や小川で小魚や水生生物と遊ぶ子供たちの姿などを消し去りました。コンクリートの川にはメダカやモロコ、フナ、ドジョウ、ドンコといった、それまではどこにでもいた小魚たちは全くなくなりました。川底の土

や泥の中にいた魚の餌になる水生昆虫がコンクリート底になり生息できなくなったからです。また、両側の土手から川面に向かって生えていた野草たちも全くなかったことにより、魚の産卵の場所や稚魚たちの隠れ家もなくなりました。そして何よりも川の底が深く掘り込まれ、底の浅い小川と田んぼとの水のつながりが完全に断たれたため、田んぼを主な産卵場所にしていたメダカは、その主要な産卵場所をなくしてしまいました。

全国的にメダカがいなくなったのは、この三面張りの拡大と密接な関係があります。もともと、メダカは水の表面をゆったりとしか動けない魚であり、流れのある水域で産卵をすることができません。田んぼがメダカにとっては最も適した産卵場所であったのです。

三面張り化により、田んぼと三面張りで作られた水路は水の交流が完全に断たれ、メダカが産卵のために田んぼに入り込むことが出来なくなりました。メダカは急激にその数を減らし始めたのです。

この三面張りはまた、農村部に治水的にも大きな影響をもたらしました。水の通りが良くなるというのはプラス面とマイナス面があります。周囲の田んぼが宅地に転用され住宅街になれば、田んぼがもともと持っていた遊水能力が顕著に減少します。結果的には少しの雨でも水は三面張りの水路に全て流れることにより、流量が増え、下流部で洪水がおきやすく、鉄砲水とよばれる現象が頻繁に起き始めました。しかも流れが非常に早くなり、集中豪雨時には傍には近寄りがたい恐ろしい勢いで流れます。おそらく一旦転落すると佐保川を通過して大和川へ流されてしまいます。

近年、こうした三面張りがもたらした環境面や生活面、治水面の様々な問題からようやくこの三面張りを取り外し、もとの土の川を取り戻す動きが一部で出始めています。

ところで「めだかの学校」の歌詞が茶木滋によって作られたのは昭和 25 年(1950 年)で、中田喜直が曲をつけて、昭和 26 年(1951 年)にNHKラジオ番組「幼児の時間」のなかの「歌のおけいこ」のコーナーで発表されたそうです。中田喜直は当初、この歌がそんなにヒットするとは全く思っていなかったそうで、また当初の評判はあまり芳しくなかったようです。しかし、次第に日本中に知れ渡るようになり、昭和 29 年(1954 年)には文部省芸術選奨文部大臣賞を受賞し、日本を代表する童謡になりました。

茶木滋は童話や童謡を作りながら製薬会社に勤務するサラリーマンで、この曲の歌詞は昭和 21 年(1946 年)にたまたま買い出しのために訪れた神奈川県小田原市にある荻窪用水で、メダカを見つけた息子との間の会話がこの歌詞に結びついたとされています。息子がメダカを見つけ大喜びで大声を上げるとメダカが姿を消したので、茶木が「あんまり大声を出すからだよ」と言うと息子が「大丈夫、また来るよ。だってここはメダカの学校なんだもん」と答えたというエピソードが残されています。

さて、こうしてメダカの減少について書いてきましたが、小澤祥司さんというメダカを通して自然の再生のための活動を地道にやっておられるエコロジストが、その著書の中で、こうした問題についてとても的確な指摘をなさっておられるますので、最後にその指摘をご紹介します。まとめにしたいと思います。

「私たちは、成長を続けることでよりよい未来が訪れる。成長(発展)の向こうにはバラ色の未来が待っており、子や孫の時代にはもっとよくなると信じてきた。

しかし、私たちのまわりには成長に伴う負債が膨らんでいる。増大する廃棄物、大気や水系の汚染、自然環境の消失、失われるコミュニティや固有の文化……。私たち人間は、成長を保証する前提として、自然という「資源」はただであると思い込んでいた。自然はそのままでは無価値であり、人間が手を加えて初めて価値を産むというのが、近代産業文明の基本的な考え方である。その過程でさまざまな問題が生じるのは、ただ科学技術が未熟なだけだと考えていたのである。すべての科学技術がいずれ解決してくれるのだと。もちろん、それは幼稚な幻想である。」

「ほんとうの豊かさは変化よりもむしろ、変化しないことにある。数多くの喪失を経て、ようやく私たちはそのことに気づこうとしている。もともと自然は刻々と変化するものである。四季のうつろい、植物の生長、風や雨によるさまざまな作用。しかし、『むら』ほどの大きさで見れば、新しい季節が巡ってくるたび、前と変わらぬ良く似た風景がまた現れてくれた。かつての『ふるさと』の風景はそうだった。このような生態的恒常性が、持続可能な社会への鍵である。それは太陽エネルギーの適正な利用と物質循環の実現なくしては、あり得ないからだ。そしてそのような持続可能なシステムは人間の都合だけでは成り立たない。エネルギーの受け渡しと物質循環は、地球上の多くの生きもののネットワーク(生態系)によって成り立っているシステムなのである。それは太陽を起源とするエネルギーが、生命によってバトンリレーされている姿である。」

「私たち人間が効率を求めてつくってきたものは『まっすぐで』『切り立った』構造物ばかりだった。それらの構造物は同時に私たちの自然とのつながりも断ち切ったのである。人間も生態系のつながりの中でしか生きていけないはずである。持続可能な社会を築くためにがもう一度つながりを見つめ直し、つくり直すことを私たちは考えるべきだ。」

(小澤祥司著「メダカが消える日」岩波書店)



皆様方にご愛読いただいておりますやすらぎ通信は、5月1日号から新たな筆者の下、装いを一新してお届けいたします。

NEWS

【(新)白内障 日帰り手術開始！！－眼科－】

当センター眼科では、白内障手術を重要手術の一つとして行ってきました。白内障とは水晶体が混濁する病気多くは加齢性変化です。自覚症状としてはぼやけて見えたりまぶしく感じられたり様々です。当科では平成24年には1322件と10年前と比べても大幅に増加しています。

現在まで当科では白内障手術をすべて入院手術で行ってきました。白内障手術機器の進歩や感染症対策の充実により安全性も高まってきました。また社会的な背景もあり当科での白内障手術は原則として日帰りで行うことになりました。また日帰り白内障手術の術中や

終了後に万一、全身状態などが急変した場合には専門医師による対応や入院が可能ですのでご安心下さい。

白内障手術ですが、局所麻酔で行い手術時間は15～20分程度です(時に30分以上かかる場合もあります)。通常、傷口は3mm弱で超音波により水晶体核を砕き、その周りの柔らかい皮質を吸引した後に眼内レンズを挿入します。術後は1時間程度安静の後に問題がなければ帰宅していただけます。術後の通院は必要です。重篤な合併症としては感染症などがありますが、通常のもは目薬や日にち薬で良くなっていきます。詳しいことは診察時にお尋ね下さい。

眼科 主任部長 内堀 恭孝

【(新)長井美樹医長等、「摂食嚥下ケアがわかる本―食の楽しみをささえるために―」を共同執筆・出版 ―耳鼻咽喉・頭頸部外科―】

3月にエピック社より「摂食嚥下ケアがわかる本」(監修松田 暉先生、編集野崎 園子先生)が出版されました。

本書は兵庫医療大学リハビリテーション学部教授で神経内科専門医の野崎園子先生を中心に、当センターから耳鼻咽喉・頭頸部外科 長井美樹医長、摂食嚥下認定看護師 山本陽子看護師と西尾依見子看護師、リハビリテーション科 大黒大輔言語聴覚士もそれぞれの専門分野で分担執筆しております。

本書の対象は患者さん、ご家族の方、介護者の方など嚥下に困っているすべての方に読んでいただけるものとなっています。摂食嚥下機能改善のための体操や訓練、姿勢、食形態、食器、食べ方や介助法、摂食嚥下を助ける装置や補助具、手術法、チューブ栄養や胃瘻についても解説されています。医療従事者の方であれば患者さんへの説明などにも使えると思います。是非、多くの医療関係者、患者さんやご家族の方などにお読みいただければと思います。

構成(略)

はじめに 松田 暉

9 食事介助のコツ 山本陽子・西尾以見子ほか

14 家庭でのリスク管理 山本陽子・西尾以見子ほか

18 繰り返す誤嚥性肺炎への対応 山本陽子・西尾以見子ほか

19 誤嚥イコール絶食ではない 大黒大輔

20 経鼻経管栄養・経腸栄養剤 山本陽子・西尾以見子ほか

22 誤嚥を防止する手術 長井美樹

23 嚥下を助ける手術(嚥下機能改善手術) 長井美樹

26 専門資格:摂食嚥下障害の認定資格 山本陽子・西尾以見子ほか

おわりに 野崎園子

【(新)外科から新たに呼吸器外科が独立しました！ ―呼吸器外科―】

呼吸器疾患の診療におきましては、地域の先生方には平素より大変お世話になりまして有り難うございますこのたび、平成25年4月から呼吸器外科が独立することになりました。

当センターの呼吸器外科はこれまでは「外科」のなかの一分野として、4つの領域(消化器外科、乳腺内分泌外科、呼吸器外科、小児外科)の一つとして業績を積んで参りましたが、この4月から独立することになりました。

診療内容は、肺癌、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍など胸部の腫瘍性病変が主な対象です。胸腔鏡を用いた内視鏡手術による低侵襲治療を積極的に行い入院期間の短縮を図っており、腫瘍性病変の他、気胸、膿胸や胸膜炎などに対しても内視鏡治療を積極的に行っています。当センターでは PET-CT 検診も始まっています。胸部領域における未確定の腫瘍性病変や、胸水など胸膜疾患に対する診断の機会・必要性は今後ますます増えていくものと思われまます。胸部疾患の診断に対しても胸腔鏡手術の手法を用いて積極的にアプローチしていきます。

胸部領域の診療におきましては、これまでも呼吸器内科、画像診断科、放射線治療科と連携して診断治療を行って参りましたが、呼吸器外科の独立を機に一層連携を強化し、診療科横断的な体制で日々の診療と集学的治療に当たっていきたく思います。

呼吸器外科の標榜により、これまで以上の充実した地域医療連携を行えるよう努め参りますので、何卒ご指導の程お願い申し上げます。

大阪府立急性期・総合医療センター
呼吸器外科部長 大森謙一

【(新)下肢静脈瘤 血管内レーザー治療を実施しています。—形成外科—】

従来下肢静脈瘤の治療は、医療機関によって血管外科、形成外科、皮膚科などの診療科で行われてきましたが、当院では平成 18 年より形成外科にて下肢静脈瘤の診断から治療までを一貫して行っております。形成外科で下肢静脈瘤の手術を行うメリットとしては、形成外科独自の繊細な手法により、より整容面に留意した手術結果を得ることが出来ることです。

また、最近ではストリッピング術(大・小不在静脈を抜去する手術)において、従来から使用されてきた外翻式ストリッパーに比べ、組織侵襲の少ない内翻式ストリッパーを導入するなど、患者様にとって侵襲の少ない手術を心がけてきました。

さらに、平成 24 年 10 月からは、下肢静脈瘤用レーザー(ELVeS レーザー)を導入し、レーザーを用いた血管内凝固による下肢静脈治療を開始いたしました。本治療は今までのように大きく皮膚を切開する必要がない画期的な血管内手術で、患者様の負担も軽く、症例によっては日帰り手術も可能となりました。費用面においても、平成 24 年 4 月より正式に保険適応が認められ、すべて保険で診察が可能です。

今まで症状はあるが、手術まではイヤだと思われていた患者様にも、安心して治療を受けていただけると考えております。

ご相談は 形成外科まで。

【(継)PET-CT検診ができるようになりました—料金 98,000 円】

- ・ 当センターのPET-CT装置は国内で 5 台目の TOF 技術(Time-of-Flight)を用いた世界最高水準のもので、ノイズの少ないクリアで高品質な画像を得ることができます。
- ・ 一度に全身(頭部から大腿部)の FDG-PET がん検診と CT 検診を受診できます。

- ・ 診断は全て放射線診断専門医・PET 診断認定医が行います。
- ・ 検査室のインテリアや照明は全体が落ち着いた心地よい空間となるよう、くつろげる環境づくりに配慮いたしました。

PET 検診ご希望の方は「患者相談窓口」にお申し出ください。

電話申し込みは「医療相談コールセンター」

電話番号 06-6692-2800

06-6692-2801 まで

【(継)新たな専門外来—喘息専門外来を開設しました！ 免疫リウマチ科】

このたび、気管支喘息(喘息)治療の標準化、喘息発作患者さんの受け入れ体制の改善、そして喘息死ゼロを目指して、喘息専門外来(成人)を開設しました。

気管支喘息(喘息—ぜんそく)の治療は、近年めざましく進歩しました。

喘息の診断にお困りの方、あるいはなかなかよくなる喘息患者さんは是非、当科の喘息専門外来(成人)を受診して下さい。

喘息に関しては、息苦しくなる発作がその時に治まるだけでいいというものではありません。発作を繰り返すことで、将来気管支が細くなったまま広がりにくくなり、また、気管支がより過敏な状態となることで重症になる可能性が高くなります。従って発作を予防する(炎症を治める)治療をすることが最も大切です。

吸入ステロイドを中心とした炎症を治める治療に重点を置き、抗 IgE 抗体療法なども積極的に導入させていただきます。また、必要な患者さんには喘息日誌やピークフローによる自己管理をお勧めし、その指導をさせていただきます。

ご相談は、免疫リウマチ科 主任部長 藤原 弘士 まで

【(継)小児消化器病・肝臓病のお子様の健やかな成長を支援します—小児科】

当センター小児科では、消化器病・肝臓病の治療に積極的に取り組んでいます。特に炎症性腸疾患(IBD)・ウイルス肝炎については「小児消化器チーム」として専門診療を行っています。炎症性腸疾患は原因不明の慢性疾患であり、最近我が国の子どもでも増加しています。当小児科ではステロイド静注療法やステロイドパルス療法に加えて、白血球除去療法、免疫抑制療法(イムラン、タクロリムス)を取り入れた治療を行っています。治療の進歩によって入院回数と日数は大幅に減少し、初回の寛解導入の期間を除けば、おもに外来治療で寛解を維持できております。このことにより患者さんの日常生活や学校生活も大きく改善しております。とくに今年から難治性あるいは重症の潰瘍性大腸炎・クローン病のお子様を対象に、インフリキシマブ(商品名:レミケード)の治験を開始しました。従来の治療では良くならない炎症性腸疾患(IBD)のお子様でも劇的に良くなる方を経験しております。レミケードの治験の実際については、小児科主任部長などに遠慮なくお問い合わせください。

肝臓病ではウイルス肝炎(B型、C型)、自己免疫性肝炎、脂肪肝、脂肪肝炎、硬化性胆管炎、糖原病、ウイルソン病、原因不明の肝疾患などの診療を行っています。とくにB型肝炎およびC型肝炎のインターフェロン治療(注射薬)、核酸アナログ治療(経口薬)に積極的

に取り組んでいます。治療の進歩によってB型肝炎、C型肝炎ともほとんどのお子様において肝炎が良くなっております。

治療に難渋されている潰瘍性大腸炎・クローン病などの消化器病およびウイルス肝炎などの肝臓病に関してはどうぞお気軽にご相談下さい。

小児科 主任部長 田尻仁

【(継)「医療相談」コールセンターのご利用を一地域医療連携室】

患者さんやご家族などからの医療や病院利用に関するご相談を、専門の看護師が電話でご相談に応じさせていただく「医療相談」コールセンターを開設運用しております。是非お気軽にご利用ください。

電話番号は 06-6692-2800 (専用電話回線)

06-6692-2801 (専用電話回線)

相談日時 月曜日～金曜日 午前9時～午後5時

相談対象 医療相談を希望されるご本人若しくはご家族等

相談員 看護師

【(継)診察予約変更センター

11 診療科において診察の予約日・時間の変更を電話で受け付けています！

当センターでは、下記の11診療科を対象に、電話で診察時間の予約の変更ができるよう「診察予約変更センター」を設置しています。是非、積極的にご利用ください。なお、このサービスは初診に関しては行っておりませんので、ご注意くださいようお願いいたします。

(電話番号) 06-6692-1201(代表)にダイヤルして
「予約変更センター」と言ってください。

(受付時間) 午後3時～午後5時(平日のみ)

(対象診療科) 内科・呼吸器内科 消化器内科 糖尿病代謝内科 整形外科
免疫リウマチ科 皮膚科 形成外科 腎臓・高血圧内科
神経内科 脳神経外科 耳鼻咽喉・頭頸部外科

【(継)入院治療費の概算に加え、

新たに外来での検査費用の概算を予めお知らせするサービスを始めました。】

当センターにおきましては、入院患者さんへのサポートを総合的・集約的に行う入院センター(やすらぎセンター)におきまして、ご入院申し込み時に予め標準的な治療を行った場合の概算費用をお知らせするサービスを行っています。

また、昨年、11月1日から、新たに、CT、MRI、RI、エコー検査など検査費用の概算を医療・福祉相談コーナーなどでお知らせするサービスを開始しました。

今月の催し

【(新)大好評!!】

相愛大学連携・外来糖尿病教室 ～知って得する! 糖尿病の付き合いかた～】

日 時 4月17日(水)午後2時～3時30分

場 所 本館1階アトリウム

内 容 「膵β細胞を守るインスリン治療」

糖尿病代謝内科 部長 馬屋原 豊

「自分の体重を知ろう」

糖尿病看護認定看護師 後藤 博美

「食事の基本」

栄養管理室 管理栄養士 笠井 香織

午後1時～ 体脂肪測定(希望者)

(参加無料)

【(新)第14回万代・夢寄席 一旭堂小二三 講談の会一】

～若手女流のホープ、旭堂小二三の人情講談!～

日 時 平成25年4月23日(火) 午後2時～

場 所 本館3階講堂

出 演 旭堂 小二三

(入場無料)

【(新)今月のすこやかセミナー】

結核について

日 時 4月26日(金) 午前11時～12時

場 所 本館3階保健教室

講 師 総合内科 医長(部長代理) 大場 雄一郎

(参加無料)

【(新)リウマチ患者さん、ご家族のための医療講演会】

日 時 4月28日(日) 午後2時～3時30分

場 所 堺市総合福祉会館4階第3会議室(定員54人)

講 演 膠原病教室～関節リウマチを含めて

講 師 免疫リウマチ科 主任部長

免疫リウマチ・バイオサポートセンター長

藤原 弘士

(お問合せ) 特定非営利活動法人 堺難病連

しままち 様 (090-3972-5874)

【(新)第9回病院ギャラリー企画展

岩宮武二“アンコールワットで仏像を撮る”写真展】

岩宮武二は1920年に鳥取県米子市に生まれ89年に没するまで、日本を代表する写真家として活躍。1966年46歳で大阪芸術大学の教授となり、後進の育成に貢献した。「今に生きる」を座右の銘にしていた岩宮が、クメール・ルージュによる厳しい破壊にもかかわらず生き残ったアンコールワットの仏像たちを過去から現在、現在から未来への時間的流れのなかで優しく切り取った秀作で今回の企画展を構成。

(本企画展は、大阪府江之子島文化芸術創造センターのご協力を得て実施します。)

開催期間 2013年4月22日(月)～8月23日(金)(午前9時～午後5時30分)

(展示作品 35点—撮影 1986年)

- ・ アンコールワット正面全景
- ・ 第一回廊と中央祠堂
- ・ 獅子
- ・ 経蔵
- ・ カウラーヴァ軍とバーンタヴァ軍の戦闘
- ・ 闘う兵士と怪鳥
- ・ バーンタヴァ軍と軍像
- ・ 十字中回廊
- ・ 群舞するデヴァター
- ・ 十字中回廊の諸尊
- ・ 連子窓
- ・ アシュラ像・アンコールトム
- ・ 南大門・アンコールトム
- ・ 南大門四面仏・アンコールトム
- ・ 像の訓練・象のテラス
- ・ たわむれる子どもたち
- ・ 戦闘用の牛車・象のテラス
- ・ 五つ頭の神馬・象のテラス
- ・ 踊る守護神・象のテラス
- ・ 第一回廊・バイヨン
- ・ 人々の暮らし・バイヨン
- ・ 食事の支度・バイヨン
- ・ 闘うチャム軍とクメール軍
- ・ 第一回廊列柱・バイヨン
- ・ 蓮の上で踊るアプサラス・バイヨン
- ・ 中央祠堂・バイヨン
- ・ 四面塔
- ・ バイヨンの微笑

- ・ バンテアイ・フレイ正面
- ・ 獣面人身像
- ・ 守護神
- ・ グリシュナとバララーマ
- ・ 五つ頭のナーガ
- ・ 人面塔・プリヤ・カン
- ・ プレー・ループ全景

【(継)第8回病院ギャラリー企画展—今月まで—】

—昭和の巨人・グラフィックデザイナー 田中一光の世界—

戦後から昭和が幕を閉じるまでの期間、日本のグラフィックデザイナーの絶えずトップランナーを突っ走った田中一光。その鋭い感性で、未来を鋭くキャッチし、広告やポスターデザインに取り入れ時代を先導した姿に、多くのフォロワー達が胸を熱くし、今もなお彼の姿を追いかけている。

今回は、大阪を中心に活躍した、我が国のグラフィックデザイナーの巨匠が残したポスター作品の数々の中から、我が国の経済が絶頂期にあった大阪万博以降の作品を取り上げて時代をともにたどります。

本企画展は、大阪府江之子島文化芸術創造センターのご協力を得て実施します。

日 時 平成 25 年 4 月 19 日(金)まで (午前 9 時～午後 5 時 30 分)

場 所 本館 2 階 現代美術空間 病院ギャラリー

【(予告)リウマチ教室—平成 25 年度、第 1 回】

日 時 5 月 14 日(火) 午後 2 時～3 時 30 分

場 所 本館 3 階保健教室

① 最新の関節リウマチ治療 ～生物学的製剤を中心に～

講 師 免疫リウマチ科 主任部長

免疫リウマチ・バイオサポートセンター長 藤原 弘士

② 自己管理、自己注射指導

講 師 免疫リウマチ科外来 看護師主任 浦出 節子

【(予告)第 12 回府立総合医療センター眼科 Update Conference を開催します！

—眼科—】

主催:大阪府立急性期・総合医療センター眼科

今回は、大阪大学大学院医学系研究科感覚機能形成学准教授 森本壮先生を特別講演者としてお迎えする予定です。日常臨床にすぐに役立つ内容ですので皆様奮ってご参加下さい。

日時: 平成 25 年 5 月 18 日(土曜日) 午後 2 時 30 分～ 5 時 30 分

場所: 大阪府立急性期・総合医療センター 本館 3 階 講堂

会費: 無料

主催: 大阪府立急性期・総合医療センター 眼科

単位：日本眼科学会専門医制度生涯教育事業(3単位)

～プログラム～

(一般講演)

1. 両眼内レンズ挿入後フィブリン析出による瞳孔ブロックを認めた一例
当センター眼科 眞野 福太郎
2. コンタクトレンズ関連角膜炎 当センター眼科 豊川 智加
3. アイリーア®の使用経験 当センター眼科医長 松田 理

(緑内障セミナー)

緑内障診療における OCT の意義と読影法

当センター眼科主任部長 内堀 恭孝

(特別講演)

「小児の白色瞳孔の鑑別とその治療法」

大阪大学大学院医学系研究科感覚機能形成学准教授 森本 壮 先生

連絡先 TEL:06-6692-1201

FAX:06-6606-7102 内堀 恭孝

【(予告)元宝塚歌劇団花組！湯井一葉(ゆい かずよ)・シャンソンコンサート】

～美しき5月のパリの歌姫 湯井一葉パリを歌う～ コンサート

湯井一葉さんは、宝塚歌劇団花組を退団後、パリに留学。帰国後、関西を代表するシャンソン歌手として東京、大阪等でコンサート活動、ホテルのディナーショーと幅広く活躍を続けられ、1988年には大阪文化祭奨励賞を受賞されました。明るくさわやかな実力派歌手として、シャンソンの固定観念に縛られない新鮮で洗練されたステージと共に、幅広い世代に親しまれています。

日時 平成25年5月20日(月) 午後2時～

場所 本館3階講堂

出演 湯井 一葉(ゆい かずよ)

ピアノ:河野 良(かわの りょう)

(入場無料)

【(予告)大好評！！】

相愛大学連携・外来糖尿病教室 ～知って得する！糖尿病の付き合いかた～】

日時 5月21日(水) 午後2時～3時30分

場所 本館1階アトリウム

内容 「糖尿病の飲み薬の話」糖尿病代謝内科 畑崎 聖弘

「運動療法について」 (未定)

「塩分について」 栄養管理室 管理栄養士 笠井 香織

午後1時～ 体脂肪測定(希望者)

(参加無料)

【(予告) 第4回肝臓病教室】

日 時 5月 25(土) 午前 10 時～12 時

場 所 本館 3 階講堂

内 容 1. 血液検査で診る肝臓病

講師 消化器内科 副部長 春名 能通

2. 肝臓とアルコール～医師からのお話し～

講師 消化器内科 主任部長 井上 敦雄

3. 肝臓とアルコール～栄養士からのお話し～

講師 栄養管理室・管理栄養士 織田 都

(9 時 30 分～ 希望者に対し体脂肪測定を行います。)

(入場無料)

【(予告) 第 25 回相愛大学連携コンサート・ピアノ連弾】

～軽やかに奏でるピアノの音色は、七色にキラキラ輝く五月雨の色～

日 時 5月 30 日(土) 午後2時～

場 所 本館 3 階講堂

出 演 山下 弥生(やよい)(相愛大学音楽学部 専攻科)

小西 菜央(なお)(相愛大学音楽学部 専攻科)

演奏曲目 (調整中)

(入場無料)

【(予告)府民公開講座】

日 時 6月 8 日(土) 午後1時 30 分～午後3時

場 所 本館 3 階講堂

内 容 「心房細動について」 心臓内科副部長 古川 善郎

(入場無料:先着 100 名)

【(予告)府民公開講座】

本コーナーは、当センターと様々な形で連携し、地域により地域を支えるという理念を共有している個人、団体が主催されているイベントをご紹介します。

【(新)当センターがん遺族会“赤とんぼの会” Aさんからのお便り】

「私は一昨年(2019年)の9月、最愛の主人を末期の肝細胞がんで亡くしました。検査結果を私と姉で聞きに行き、末期ということで治療方法もなく、どうしたらいいのか受け止めることもできず、主人は3週間で私をおいて一人旅立ってしまいました。57歳でした。子どもを3人育て結婚させ、これから二人の人生を楽しもうと話していた矢先のことでした。

私は何故もっと早く病気に気づいてあげられなかったのかと、毎日毎日自分を責め続けました。後悔ばかりが残り、毎日食べることも外出することもできず家に引きこもりの生活となってしまいました。

2か月が過ぎた頃、娘が「お母さん、病院のなかに“赤とんぼの会”というのがあるんやけど

一度行ってみたら？」と声をかけてくれました。娘に励まされ、勇気を出して行くことにしました。

タクシーに乗り、病院に着くなりとても辛くなり、涙が溢れ3階のエレベーターの前で待っていてくださった担当の看護師さんに抱きついて泣いてしまいました。部屋に入ると参加されている方々に紹介していただき、またその場で泣き続けてしまいました。だけど、このような私を赤とんぼの会のメンバーは暖かく包み込み迎え入れてくれました。

「あなた一人じゃないみんなと一緒になのよ。思いはみんな同じよ、大丈夫。」と励ましていただいたことが心の奥まで届き、帰るときには涙は止まっていました。また、翌月も、メンバーのお話しをお聴きし、泣いてばかりの日々を送っていました。

しかし、それがいつしか毎月の赤とんぼの会の定例会が待ち遠しくなっている自分に気づき始めました。外出するのは苦手でしたが、いつの日か赤とんぼの定例会の日に皆さんに会えることがとても楽しみになり、朝からうれしい気分になることができるようになりました。

皆さんに甘えさせていただき元気をいただき一年が過ぎ、今は赤とんぼの会と出会えたことに感謝する日々を送っています。

私と同じ経験をされている方、一度赤とんぼの会の活動に参加しませんか？扉を開けてみませんか？みんなが待っていてくれますよ。」

『赤とんぼの会』は毎月第1・3木曜日 15時～17時、本館3階討議室(難病医療情報センター向かい)で開催 (お問合せ) がん相談支援センター

Topics

【(新)やすらぎのプロムナードで春の訪れをキャッチー北側通路周辺ー】

いよいよ4月。今年も満天星ツツジが美しい花をつける季節がやってきました。また、アジサイの若芽もぐっと膨らみ、美しい若緑の葉を広げ始めます。

生命の躍動感あふれる春。プロムナードもいよいよ1年で最も美しい時を迎えます。このプロムナードに身を横たえ、コーヒでも飲みながらゆったりと春の息吹を満喫するのも心の癒しになるのではないのでしょうか。

今月のひまわりさん

各種窓口でセンターご利用のお手伝いをさせていただいている医事事務委託会社ソラストの窓口担当を紹介させていただくコーナーです。

【(新)初診担当 上田さんの巻】

私は、初診窓口で地域の開業医の先生からご紹介していただいた患者さんや初めて来られた患者さんの受付をさせていただいております。

先日初診窓口で、受付をしていたときのお話です。番号をお呼びさせていただきますと、お母さんと4歳ぐらいの娘さんが受付に来られました。

とても寒い日だったので、その娘さんはかわいいコートとマフラー姿で、席に着かれました。必要な項目をお伺いし、カルテを作っていると、その娘さんが「今日はとても寒いですね

～」となんだかとてもうれしそうな表情。お母さんも「そうですね～」。

私は、できるだけ早く受診していただくお手早く準備を進めていると、その娘さんは、私の手元を興味深げに見ておられました。

そして、新しい診察券をお渡しするとお母さんは、娘さんに名前を読んであげられました。娘さんは、その間もずっとニコニコ。きっと、お母さんと一緒にお出かけできたことが、本当にうれしかったんでしょう。

この娘さんのように、本当に嬉しい時に、人はすてきな笑顔になれるんだと思います。患者さん早く元気を取り戻していただくことが、私自身の喜びとなれば、私もきっと、すてきな笑顔で患者さんをお迎えできると思います。今日の出来事を心にこれからも素敵な笑顔で患者さんをお迎えできるよう頑張りたいと思います。

その他のお知らせ

【(継) やすらぎ通信はメルマガで！】

「やすらぎ通信」は、メルマガでも配信しております。ご希望の方は、当センターホームページからアドレスを登録していただきますようお願いいたします。なお、ホームページのご検索は、「大阪府立急性期・総合医療センター」にて可能です。

【(継) 医療費の支払いはキャッシュカードでできます！】

当センターの医療費自動精算機は、デビットカード対応となっておりますので、ほとんどの金融機関のキャッシュカードでお支払いができます。

これらの金融機関は J-Debit に加盟していますので、キャッシュカードに自動的にデビット機能が付与されているからです。(ただし、キャッシュカードでお支払いいただいた場合は即座に口座から引き落とされることとなるため、口座に引き落とし金額以上の残高が必要ですのでご注意ください。)

このため、医療費の支払いのための現金を持たなくても、キャッシュカードさえあればお支払いが可能です。

また、引き落としの手数料は不要ですので大変便利です。是非ご利用ください。

なお、合わせて一般のクレジットカードでのお支払いもできます

当センターは、当センターが「希望の医療空間」「よろこびの医療空間」「やすらぎの医療空間」となるよう日々努力しています。